

# カオハガン島で得たもの

私はカオハガン島でたくさんのことを学び、たくさんのお宝を得ることができた。

まず、崎山さんがカオハガン島を買い取るまでの経緯や、カオハガン島に対してどんな思いがあるのかを知ることが目的の一つであった。崎山さんはアメリカに12年も住んでいたことがあり、また世界72か国をまわっているのである。私はこのカオハガン島が初めての海外だったので72か国という数字にとっても驚いたのを覚えている。

そして崎山さんはセブ島で出会った方とカオハガン島へ行ったのがきっかけである。カオハガン島に来た時の気持ちを「fall in love 恋に落ちた」とおっしゃっていたのがとても印象に残っている。「何もなくて豊かな島」であるカオハガン島は、とても魅力的でストレスフリーな空間である。それは子供たちの笑顔からうかがうことができる。本当にキラキラした笑顔で、私自身も5泊6日という短い期間の中でのびのびと毎日を過ごすことができた。人間が生きていく上での最低限必要なもののニーズを助けるのが大事であり、カオハガン島の生活スタイルを守っていききたいという崎山さんの思いを聞いてカオハガン島への愛情が伝わってきた。

子供たちは幼い頃から親の手伝いをし、15歳くらいになると自分の身の回りのことは全部できるようになり、一人でも一生暮らしていける能力を身につけるということをおっしゃっていた。島民のたくましさを感じたと同時に、自分への未熟さを感じた。カオハガン島の島民と比べて日本人は自分自身の暮らしについて知り尽くしていないという大きな違いに気づくことができた。

崎山さんにお会いして直接お話を聞いてカオハガン島について知ることができて本当によかった。もっとカオハガン島のことを深く知りたいと感じた。



次に、私が一番興味のある節水・節電の生活である。節水・節電の生活を実際に体験してみて、最初は慣れるまで少し大変だったが、普段日本での生活では経験できないものであった。雨水をタンクにためて生活用水として使用しているのを間近で見て、蛇口をひ

ねって水が出てくるということが当たり前ではないということに気づかされた。

また、日が落ちた後の唯一の明かりはランプと持参した懐中電灯だけであった。

普段生活の中で使っている水や電気がどれほど貴重なものかを考えることができた。

日本の生活とはかけ離れた、まさに自然の中に身を置き、自然の流れに沿って生活するということを肌で感じた。

しかしそれは不便ということではなく、今の便利すぎる日本の生活から余計なものを省いた生活であり、普段感じることのできない自然とつながって暮らすという大事なことに気づかされたのと同時に、自分の生活を見直すことができたいい経験であった。

夜は気持ち良い風と心地よい海の波打つ音を聞きながら眠りにつき、朝は朝日が差し込んで生き物たちの元気な鳴き声によって目覚める。私は今までにないくらい気持ちよく眠りにつき、しゃきっとした朝を迎えられた気がした。朝は潮がひいていて夜は満ちているので全く違う光景を楽しむことができた。私は幼いころから自然が大好きなので、体全体で自然を感じられるカオハガン島の暮らしにどんどん惹かれていった。



そして、自然に囲まれたカオハガン島の生活は自給自足である。その日食べる分だけを収穫するという暮らしである。一日一日を生きるために生きるという島民の生き方にとっても感心した。漁師さんは魚やカニなどを取りにボートを出し、自ら海に潜って取りに行く。朝方は潮がひいた浅瀬で小さな魚や貝を取っているのである。日本ではスーパーやコンビニに行けばたくさん商品が並んでいて簡単に食べることができるが、カオハガン島では苦労して食料を確保して、常に「生きる」ということが感じられた。

そんな中、日本は食糧全体の半分以上を輸入に頼っているのが現状でありとても無力さを感じた。また食品廃棄量は世界でもトップクラスであり、世界で一番食べ物を無駄にしている国ともいえるのである。その中でもまだ食べられるのに捨ててしまう食品も多いのである。そんな中で生活をしている自分の情けなさを感じた。

今の日本人は手軽さや便利さばかりを重視して食べ物の大切さやありがたみを忘れてしまっているのではないかと考えさせられた。個人の生活だけでなく、私の暮らす日本という国についても改めて見直すことができ、日本人の食に対する意識や文化を見つめることができた。

カオハガン島の文化の一つでもある豚の屠殺は衝撃的な場面であった。

日本にいたら普通では見ない光景であるが、子供たちは目をそらさずしっかりとみていて、こうして食べ物や命の大切さを学んでいくのだろうと感じた。

食べるということは命を頂くということを改めて考えることができ、今後も食への感謝の気持ちを忘れずに生きていきたいと強く感じた。



最後に私がカオハガン島で一番強く感じたものは人のあたたかさや優しさである。

まず、カオハガン島ではすれ違う島民の方みんなが挨拶してくれたり、名前は？と話しかけてくれたりし、後日、村で会うと名前を覚えていてくれて寄ってきて話しかけてくれるのである。日本は昔フィリピンに対してひどいことをしていたという歴史があるので、正直歓迎していない方もいるのではないかと考えていた。しかし出会う方々皆さんがフレンドリーで笑顔で、私を受け入れてくれて本当にうれしかった。

また、私のつたない英語を理解しようと耳を傾けてくれたり、私が理解できないことも嫌な顔一つもせず何回もわかりやすいように説明してくれたり、とても優しく接してくれた。

家庭訪問では一家庭一人ずつだったので不安だったが、子供たちがびっくりするくらいフレンドリーですぐに私の手を取り家族のことを紹介してくれて打ち解けることができた。子供たちは私の荷物を持とうとしてくれたり、道をエスコートしてくれたり、気を使ってくれてとても優しい子たちだった。元気いっぱいたくさん笑う子たちで私の名前をたくさん呼んできてとてもうれしかった。最後にはアクセサリーもプレゼントしてくれて、とても心があたたかくなり、子供がもっと好きになった。一緒にご飯を食べたり、家事をしたり、遊んだりしてとても充実した濃いものとなった。最初は自分の英語にも自信がないので、半日も家族とどう過ごそうかなど思っていたが、お別れの時には半日では足りない

くらいでもっと話したい、もっと一緒にいたいと思うようになっていた。

私をゲストとして迎え入れてくれて、おもてなしをしてくれたロエルさん家族に本当に感謝の気持ちでいっぱいである。言葉が通じなくても人のあたたかさや優しさを感じることができるのだと初めて実感した。カオハガン島での出会いは私の一生の宝物である。



今回の体験で得たことは、国境を超えた人とのつながりを持つことができたことと、生活スタイルや文化、食事の違いなどを受け入れる柔軟性を身につけられたことである。また、私は今まで自ら行動することや初対面の方と話をするのが苦手だったが、自然と積極性がでてきて人とかかわることの楽しさを感じることができた。新しい自分に出会えて、自分の殻を破ることができたかなと感じている。

うまく言葉にはできないが、とても心に感じるものと残るものがあった。日本に帰国してからもずっと出会った島民、子供たちや、カオハガン島のことが頭から離れず、崎山さんがおっしゃっていたようにまさに **fall in love** 状態である。また機会をつくって素敵なカオハガン島を訪れて、もっと深く知り、今度は私が島民からもらった優しさや思いやりの恩を返していきたいと感じた。今回の体験をいい思い出として終わるのではなく、これを通して学んだことや気づかされたことを今後の自分の生活に生かしていきたい。